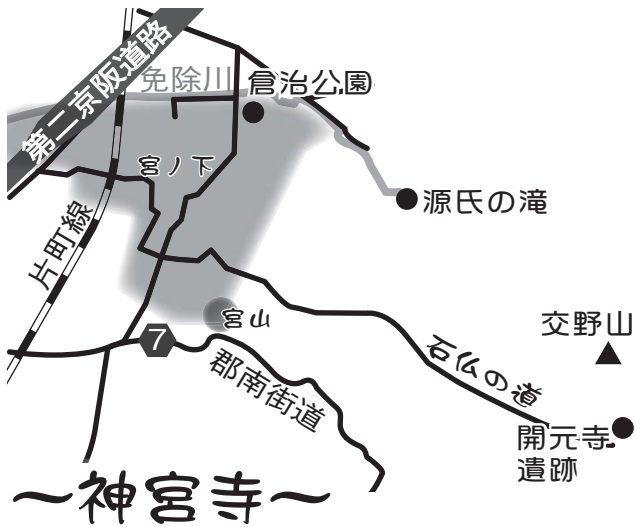


# まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)



**じんぐうじ 神宮寺** 神宮寺の集落を含む交野山麓の扇状地は一面のブドウ畑となっています。ここは明治の中ごろまでは官有地の松林でしたが、明治30年代に交野村に払い下げられ、村から南へ開墾が始まりました。そして明治40年代ごろから稲田桃が植えられるようになりました。この桃は高値で取引される甘く優れた品種だったので、明治時代の後半から太平洋戦争



昭和29年ごろの神宮寺の桃林

まで栽培されてきました。しかし、桃の収穫量は台風や戦争中の人手不足などにより著しく低下していきました。また、戦争中の食糧難により枯れた桃畑の空き地に大豆やさつまいもなどを栽培し、より現実的な食糧増産に努め、ますます桃の栽培に適さない環境となっていきました。

そこで戦後、桃に代わる新しい果樹を栽培することになり、昭和24年にブドウの試験栽培が始まりました。その試みは大成功し、「神宮寺ぶどう」としてその名を知られるようになりました。

## みやのした 宮ノ下

現在の神宮寺を中心にして、北は免除川、南は郡南街道までの交野山のふもと一帯を指します。

「神宮寺」とは一般的に宮寺とも言い、神社に付属して建てられたお寺のことです。日本に仏教が入って来た時に、それを日本の神々とどう共存させるかを考えた結果、日本の神々は、日本人に理解しやすいように仏が仮の姿を現したものであるという考え方が生まれました(本地垂迹説)。そこで神社の境内や周辺に寺が建てられ、神社と寺院の両方を管理して神社の祭祀を仏式で行う社僧が置かれるようになりました。このような考え方により、奈良時代にはすでに越前国(現在の福井県)気比神宮で神宮寺が建てられています。

交野の「神宮寺」は郡南街道沿いの通称「宮山」と呼ばれる所にあったといわれています。宮ノ下とは、この神宮寺の下の地域という意味です。また、神宮寺と対をなしていた神社の名前は伝わっていませんが、素盞鳴尊を主神とし、末社に金比羅・稲荷・天神・春日・愛宕の神が祀られていて、明治8年に機物神社に合祀されました。

## せきぶつ みち 石仏の道

神宮寺の集落に向かう登山道は「石仏の道」と呼ばれています。

鎌倉時代から室町時代にかけて山岳仏教が盛んになった時代、交野山には岩倉開元寺という大きな寺院があったといわれています。その参道に参拝者を見守るように多くの石仏が彫られ、石仏の道となりました。

石仏の道にある石造弥勒仏坐像、磨崖三尊像、石造阿弥陀如来立像、磨崖阿弥陀三尊像、石造二尊立像の5点の石仏は廃岩倉開元寺石仏群として、市指定文化財となっています。



石造弥勒仏坐像